

opack オーパック めーる

Organization for Promotion Academic City by Kyushu University



<http://www.opack.jp/>

年頭にあたって

財団法人九州大学学術研究都市推進機構 理事長 石川 敬一

明けましておめでとうございます。

当機構が平成16年10月に設立されてから、早いもので1年が経過し、年度で申しますと来る18年度からは3年目を迎えることになりました。これもひとえに、皆様のご協力によるものと感謝申し上げます。

九州大学においては昨年10月に伊都キャンパスが開校し、工学系の第一陣が移転を開始しました。本年10月には、工学系の残りが移転し、合わせて4300人の学生・教職員が活動することとなりますので、新キャンパス周辺の地域は大きく様変わりすることが予想されます。新キャンパスへの移転により施設の狭隘化や老朽化、航空機の騒音等の諸問題から解放され、新しい環境でより一層活発な研究成果が生まれますことを期待しております。

伊都キャンパス誕生に合わせて、当機構においては、昨年「九大・学研都市フェア(9月13日～19日)」、「九州大学伊都キャンパス誕生記念フォーラム(12月19日)」等の広報活動を実施するとともに、東京でのバイオ、半導体、水素に関する各種セミナー開催や「企業誘致マップ」の作成等誘致活動のための諸事業を行いました。

その他、「超高圧電子顕微鏡フォーラム」をはじめとする産学官連携やICカードを利用したビジネスインフラ構築等の共同研究に関する諸活動も精力的に実施しております。本年は、活動をより活発化し、学術研究都市づくりをさらに前進させてまいります。



国内経済にも明るい兆しが見え始めておりますが、中国をはじめとする中進国の経済及び科学技術の分野における発展は著しく、これらの国々と競っていくため、将来、学術研究都市はより重要な役割を果たすものと予想されます。

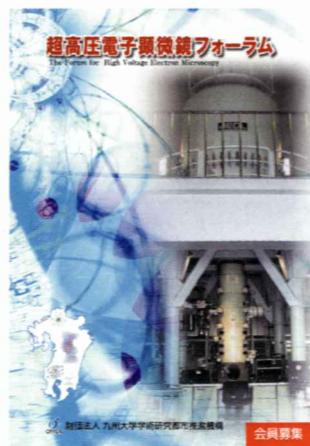
もとより、学術研究都市づくりは長い期間を要する巨大プロジェクトであります。自治体が進めるまちづくりと連携し、更に皆様方のご支援、ご協力を賜りながら、構想の実現に向け力を尽くしてまいります。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

「超高圧電子顕微鏡フォーラム」会員募集開始

～九州大学初!共同利用施設の民間開放、世界唯一の超高圧電子顕微鏡の有効活用を目指して～

当機構では、九州大学超高圧電子顕微鏡室と連携して、電子顕微鏡を活用した産学官交流・連携を促進するため「超高圧電子顕微鏡フォーラム」を設置し、会員の募集を開始しました。

九州大学超高圧電子顕微鏡室は世界唯一の「エネルギー一分光型超高圧電子顕微鏡」をはじめ9台の電子顕微鏡と解析装置などの周辺機器を備えた共同利用施設です。これらの電子顕微鏡を活用して、微細組織や原子配列の分析という研究基盤技術を強化し、将来、製薬



やバイオテクノロジーをはじめとする様々な分野で新しい産業の創出、新技術の開発に繋がると考えております。

会員へのサービスは入会の内容に応じて次のとおりとなっております。

- (1) **情報サービス** 電子顕微鏡関連ニュース、技術・製品紹介、研究報告
- (2) **コンサルティング** 電子顕微鏡関連技術相談、研究者・技術者の紹介他
- (3) **教育・研修支援** 電子顕微鏡関連研修、e-ラーニング・遠隔研修用教材、シミュレータ、解析ソフト、他
- (4) **研究・技術支援** 電子顕微鏡・各種機器利用開放・指導

<http://www.opack.jp/index.html>

問い合わせ先: (財)九州大学学術研究都市推進機構

企業立地グループ

電話 092-735-4848



活動報告

「九州大学伊都キャンパス誕生記念

フォーラム」を開催

12月19日(月)東京(浜離宮朝日ホテル)において、九州大学及び九州大学学術研究都市推進協議会と共に、「新しいアジアと知の拠点～九州大学学術研究都市が発信する未来～」をテーマとしたフォーラムを開催しました。



パネリストの皆様

当機構では、学術研究都市構想を首都圏の皆様に広く理解いただくことを目的として毎年シンポジウムを開催しており、今年度は九州大学の伊都キャンパス開校を記念して、朝日新聞社の特集として九州大学と共に開催させていただきました。

このフォーラムには、パネリストとして(社)九州・山口経済連合会会長の鎌田迪貞氏、朝日新聞相談役の箱島信一氏、作家の高樹のぶ子氏、九州大学総長の梶山千里氏を、コーディネーターとして九州大学理事・副学長の村上敬宜氏をお迎えし、「社会との連携に動き出した大学の役割」や「大きく変容しつつあるアジアの中での日本の役割」について、経済、社会、文化、教育等あらゆる角度から意見を交わしていただきました。

パネルディスカッションの中で、梶山総長からは、アジアの人々の遺伝子に合った医薬品の開発、バブルを経験した日本が、アジアに対する経済分野での指導的役割等、アジア指向に立った意見や市民が知的生活の一部として利用する開かれたキャンパスの展開について、高樹のぶ子氏からは、九州大学特任教授として進めようとしている

SIA (Soaked in Asia: アジアに浸る、アジアとの五感交流、各国の文学作品を通じての感性によるアジア交流) プロジェクトについて、鎌田会長からは、



(左)九州大学有川副学長の開会の挨拶
(右)石川理事長による閉会の挨拶

東アジア共同体構想等ますますアジアとの経済交流が深まっていく中の九州の重要性、産学連携による新産業・新規事業の創出への期待について、箱島相談役からは、アジア指向を進める九州大学への期待、産学の包括的連携、知の拠点づくりを進める九州大学の取り組みについてご意見・ご説明をいただきました。

議論は、1時間半に及び、アジア及び社会に開かれた知の拠点を目指す九州大学を担う学生・若き研究者たちへの、鎌田会長、箱島相談役、高樹のぶ子氏からのエールの言葉で締めくくられました。

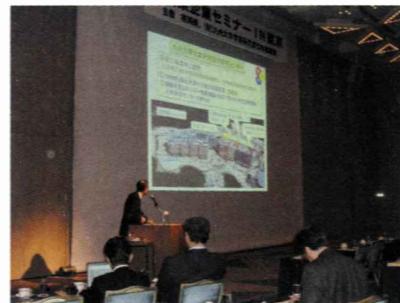
フォーラム冒頭には、有川副学長から学術研究都市構想や、伊都キャンパスの建設工事の進捗状況が説明され、会場に詰めかけた約250名の観客の皆様には、学術研究都市構想のもつ意義を十分にご理解いただけたものと思われます。

なお、当日の議論の内容については、1月末に朝日新聞の紙上(首都圏及び福岡県版)に掲載される予定です。

「福岡県企業セミナーIN東京」を開催

11月28日(月)福岡県と共に、企業誘致を促進するため東京(赤坂プリンスホテル)において、「福岡県企業セミナーIN東京」を開催しました。

本セミナーでは、テーマを「半導体・FPD産業」、「水素エネルギー」の2部構成で行いました。企業132社183名、行政・団体から49名のご参加がありました。



九州大学村上副学長の講演

キーワード: 福岡水素エネルギー戦略会議、平成17年度の研究開発テーマ、代表的な研究成果、九大での水素実験例

第1部 半導体・FPD産業の最新動向と福岡県の取組み

1. 半導体、ディスプレイ、自動車の国内本格投資が始まった!!～高まる福岡県への期待～[半導体産業新聞編集長 泉谷 涉氏]

2. 東芝のアナログ半導体開発と福岡[(株)東芝セミコン社システムLSI第二事業部北九州開発推進室 室長 本脇喜博氏]

3. ベンチャー企業にとっての福岡の魅力 [ジェイムネット(株) 代表取締役 植木一夫氏]

4. 福岡県のご紹介 [福岡県商工部 藤本新産業プロジェクト室長、田尾企業立地課長]

第2部 水素利用技術の世界的研究開発拠点を目指して

1. 水素エネルギー利用に向けた九州大学の取り組み [九州大学理事・副学長 工学研究院機械科学部門教授 村上敬宜氏]



(社)日本ガス協会 藤井部長の講演

キーワード: 天然ガスを燃料とする燃料電池、燃料電池の特徴・種類、水素エネルギーの特徴

2. ガス業界における水素利用技術・燃料電池の取り組み [(社)日本ガス協会技術開発部長 藤井 貴氏]

3.九州大学学術研究都市推進機構の紹介 [(財)九州大学学術研究都市推進機構 原事務局長]

「超高压電子顕微鏡フォーラム」オープニングセミナー

12月9日(金)福岡市(ホテルレガロ福岡)で、巻頭でも紹介しました「超高压電子顕微鏡フォーラム」について、その趣旨、産学官連携事業の紹介と会員募集を兼ねて、九州大学超高压電子顕微鏡室と共に開催(後援:福岡ナノテク推進機構)



オープニングセミナーの様子

進会議)で、オープニングセミナーを開催しました。セミナーには90名の方々

のご参加をいただきました。

オープニングセミナーに先立ちまして、記者発表会を実施し、12月9日からの会員募集の開始、九州大学初の共同利用施設の民間開放、世界唯一の「エネルギー分光型超高压電子顕微鏡」を含めた九州大学が保有する電子顕微鏡、解析装置について紹介を行いました。

セミナーでは、九州大学産学連携センター、九州大学大学院工学院、九州大学超高压電子顕微鏡室の各担当の先生から、産学連携における電子顕微鏡の意義、電子顕微鏡の有効性、将来計画等についてご説明していただき、当機構からは本フォーラム会員募集について詳細を説明しました。

このフォーラムが新たな企業・研究所誘致につながるものとして期待しております。

行事予定

「東京セミナー」

平成18年2月1日(水)13時から東京

(東京ガーデンパレス)において、九州大学未来化学創造センターと共に開催で「第1回未来科学創造センターシンポジウム」を開催します。テーマは、「水・光・ナノテク・バイオが拓く未来化学～環境から産業まで～」で、各専門の先生による講演をはじめ、企業との共同研究や技術相談等のブースを設ける予定です。

「構想促進東京会議」

平成18年1月12日(木)東京(赤坂プリンスホテル)で、東京会議委員、九州大学学術研究都市推進協議会代表委員(九経連会長、福岡県知事、福岡市長、九大総長)ほかを交えて「九州大学学術研究都市構想促進東京会議」第4回総会を開催します。

毎年この時期に、当機構が事務局となり経済界、学会、官界等で、ご活躍されている委員の皆様から「知の拠点」づくりに関するご意見を頂戴し、構想の実現に役立てるために開催している会議です。

九州大学学術研究都市とは？

●分散型地域核“ほたる”

九州大学学術研究都市構想では、糸島地域の豊かな自然や歴史の特性を十分に保存、活用した学研都市形成のため、「自然農業保全・共生ゾーン」での大規模開発を必要最低限にとどめ、周辺環境と必要な機能が共生し、学研都市にふさわしい良好な居住環境・生活環境を提供する21世紀の地域整備モデルとしての環境共生型開発「分散型地域核“ほたる”」構想を示しました。

これは「知の水源地」のまわりで「輝く」、人的交流・共同研究など大学と密接な関係を持ちながら、地域で分散的に展開される多様な活動の受け皿、また、新たな活力を生む場として、1次圏の丘陵地を基本上に展開する数十ha以下の小規模開発地です。

“ほたる”には、九州大学の高度で多様な研究開発機能と連携した「研究系」や自然環境と共生し生活する「居住系」、その他「工業系」、「レク系」などを想定し、現在、これらに基づく地区を記載した企業誘致MAP(前号掲載)を用いて企業訪問を行っています。



研究系“ほたる”開発・整備のイメージ
(九州大学学術研究都市構想、平成13年6月より)

自治体からの報告

Report from municipality

志摩町

田園居住のまちづくりの推進

志摩町の豊かな自然環境、美しい景観を生かしたまちづくりを進めるため、都市計画の線引きを行い、田園居住のまちづくり条例を制定しました。今後、住民によるまちづくり計画に基づき、九州大学学術研究都市構想における「分散型地域核(ほたる)」の計画的な実現を促進していきます。

また、九州大学関係者等をはじめとした知的居住にふさわしい、都市部では実現できない多様なライフスタイルを実現するために、ゆとりのある優良田園住宅の整備促進を図り、学術研究都市にふさわしい質の高い居住空間を供給する予定です。

九州大学関連企業等の誘致

志摩都市計画マスター プランにおいて、九州大学の西側に大学関連機能誘導ゾーンを定め、既設の工業団地を核として、九州大学と関連性のある研究開発施設、企業等の誘致を促進しています。

交通インフラの整備

学術研究都市の地域骨格軸となる学園通線の整備を促進しています。学園通線はJR九大学研都市駅、

九州大学伊都キャンパス、志摩町市街地、前原市市街地及び西九州自動車道前原インターチェンジを結ぶルートが予定されており、実現により交通利便性の向上が図られ、学術研究都市を形づくる「ほたる」の立地が促進されます。

九州大学教育学部との連携・協力

昨年4月、町の教育委員会と九州大学教育学部との間で連携・協力に関する協定が締結されました。中学校の英語教育や公民館事業の国際・異文化交流へ学生・留学生を派遣して頂く等、今後も連携・協力関係を深めていく予定で、町の教育力の活性化が期待されています。

その他

志摩町空き家・空き地バンク制度を創設し、福岡県あんしん住替え情報バンクとの連携を図りつつ、九州大学関係者等の新規居住者を受け入れる体制を整えました。自然環境と調和のとれたゆとりある住宅等を提供することが可能となり、また、新規居住者と地域住民との新たな交流をとおして、地域の活性化にもつながるものと考えています。

シリーズ 糸島の自然と歴史・文化

第3回

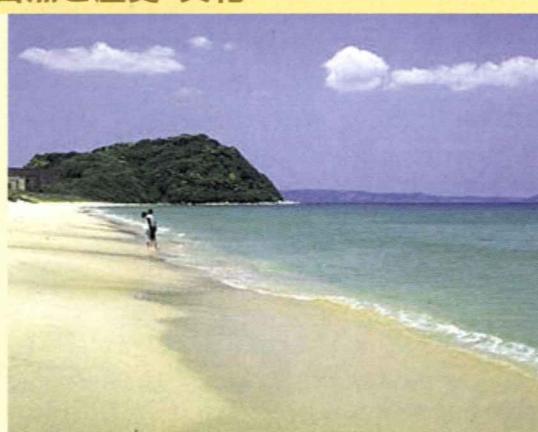
鳴き砂と

九州最古の万葉歌碑

伊都キャンパスがある糸島の地にも鳴き砂があります。二丈町西端の姉子の浜です。長さ1kmに及ぶ砂浜を潮風に吹かれながら歩くと靴底から“キュッ、キュッ”と心地よい響きが伝わってきます。石英質の砂がこすれ合う時にあたかも砂が鳴いたように聞こえるもので、英語ではsinging sandといわれています。

昔は北海道から沖縄まで沢山あった鳴き砂は今では環境汚染などで二十ヶ所程度になったといわれています。大変デリケートな砂で、後世に如何に残していくか、私達一人ひとりに問われているように感じます。

さて、202号線を車で深江の方に戻ると鎮懐石八幡宮の鳥居や石段が右手の丘陵に見えてきます。境内入り口には万葉集巻五に編載された山上憶良の詠んだ歌と序文を刻んだ石碑がひっそりと立っています。碑文には神功皇后が韓半島渡航の際に産氣を鎮めた石がこの深江の原にあり、時空(ご案内と写真提供:糸島ふるさとガイド)



姉子の鳴き砂海岸

を経ようとも多くの人々にこの伝説が敬仰されていることや、短歌「天地(あめつち)の共に久しく言い継げどこの奇魂(くしみたま)敷かしけらしも」等々が記されています。憶良の深い感動が万葉歌364字を通してなんとなく伝わってくるようです。安政六年(1859)に建てられたもので、書は中津藩儒学者、日巡武澄によるもので九州最古の万葉歌碑といわれています。

石段を登り切ると、静寂

な境内からは糸島半島や姫島、遠くには壱岐も望め、若き日の憶良が遣唐使としてこの海へと旅立った気概や、昔々の古代伝承のロマンにも触れ得たような気分になります。



鎮懐石八幡宮境内の
万葉歌碑